学校関係者評価委員会第１回議事録

日時：2013年１１月２２日(金)　19時～21時
場所：15教室

出席者：山野晴雄氏、吉野たけし氏、小泉昌広氏、永井 純氏、八尾 勝氏
列席者：湯浅 慶氏、倉持有希子氏、上松 剛氏、林 恵子氏

Ⅰ．聖書日課　ヤコブの手紙３章２節　　八尾校長朗読

Ⅱ．議事

１．　委員会の進め方の説明

八尾校長によりこの委員会を開催するに至った経緯の説明の後、本日の進め方の説明がされた。（25分間）

専門学校は正式には学校教育法１２４条に規定された専修学校の専門課程である。学校教育法１条に規定される幼、小、中、高、高専、大学、大学院とは様々な場面で扱いが異なっている。例えば災害激震法（自然災害で校舎等が壊れた時、修復には１条校は国の助成がある）や風俗営業法（１条校の周囲は風俗営業が禁止されている）などおそらく２００以上の項目がある。
近年、専修学校の卒業生が日本の経済を支える面でも大きく貢献していることを証明している数字も語られ、一方で大卒の学生の就職難が続いている現実の中で、専修学校の職業教育も少しずつ認められてきている。高校生の進路先としての役割は確立しており、高いレベルの教育をおこなっているという現実の中で、１条校との格差はなくすべきであろう、また専門学校でも１条校に入れる質の高い学校群があるのではないか、という議論の中から、新しい枠組み（学校種）を作ろうという動きが始まった。

また、もうひとつの背景には、日本の専門学校を卒業すると、専門士が与えられるが、国内でしか通用しない。外国へ出た時は高卒の扱いとなる。韓国をはじめとするＥＵ諸国、アメリカ、オーストラリアでは、大学と並ぶ職業大学校といった形で複線的な教育システムとして位置づけられている。この点では日本は大いに遅れを取っている。この部分を整備するためにも、専門学校の中でも、より職業教育に力を注ぎ、より質の高い教育を行っている学校を明確にするための新しい枠組みが必要となった。

このような背景の中で、２０１３年８月文部科学省から「職業実践専門課程の告示」がされた。文部科学大臣が認定するものであり、現在の専門士が認定されるスキームと同じである。

「職業実践専門課程」に認定されるためのいくつかの条件のひとつが、「学校関係者評価の実施」であり、外部の方々の意見を学校運営に反映させていることが求められている。この委員会では学校が行った自己点検・自己評価の結果に基づき、委員の皆様からのご意見をいただき、それを実際に学校運営に反映させていきたいと考えている。

２００７年度に専門学校の自己点検・自己評価は義務化されたが、本校では 2007 年度から毎年実施し、公表も行っている。また第三者評価については、現在はまだ専門学校は努力義務ですらないが、本校は 2007 年の初年度に受審し、昨年度 2012 年度は２回目の受審をした。全国 3000 校あまりの専門学校の中で第三者評価を２度受審した学校はまだ４校ぐらいである。

2.　委員自己紹介

出席委員および列席者が自己紹介を行った。

3.　委員長（議長）選出

吉野先生を山野先生が推薦。全員一致で決定。
吉野先生よりのご挨拶「学校教育とは学生のためになることを第一に考えて議事をすすめていきたい。」をいただいた。

4.　自己点検結果　要約版の説明　　八尾校長

資料の自己評価報告書の要約版はひとつずつ説明すると時間がかかるため、こちらの資料は後日お目通しいただき、本日は「2013 年度重点目標」を中心に説明がされた。
学校運営の今年度の重点計画は継続的に行われているものと、方向転換を含みながら今年度取り組んでいきたいものとが混ざっている。別紙の「重点目標」の青字の部分の学生募集、教育力の向上、資格取得に関して、卒業生の結集を図る、資格取得に関して、退学率低下への取り組み、卒業生の結集を図る、が課題である。「重点目標」の資料に従い進捗状況を読み上げた。

5.　質疑応答・ディスカッション

吉野：退学者については各専門学校でもきびしい状況なのは同様である。そこで卒業生のお二人にお聞きしたい。在学中に感じたこと、卒業してから思ったことなどを教えていただきたい。

小泉：特別講師として過去何回か在校生に話をしたことがあるが、在校生の生の声をもっと聞けると何かつかめる気がする。介護のイメージは色々あるが、この仕事のおもしろさ、やりがいを伝えてゆけたら良いと思う。卒業生が現場の話を自信をもってできれば、それが在校生に介護の良さとして伝わると思う。

吉野：たしかに卒業生のことばは心に響くと思う。

永井：学力の低さが退学の理由になっているがその内容をもう少し知りたい。

上松：学力が低く授業についていけないがために、意欲も低下していく場合が多い。

永井：卒業生の話や現場の情報などを早い時点で学生に与える必要があると思う。
勉強については、効率よく学べる方法を伝える機会があると良い。
自分を振り返っても、卒業してから学び方がわかったくらいである。

山野：高校時代は受け身で勉強をしている学生がほとんどである。彼らが大学、専門学校に進んだとき、入学後すぐに勉強の仕方を伝える必要があると感じる。

倉持：カウンセリングの先生が週 1 回来るが、介護福祉科では、まずは教員が相談にのり、必

要がある場合はカウンセリングを紹介するようにしている。
学業の修了に必要な心身の強さに欠け、弱さがあると思われる学生は、入学前３月に集め、事前オリエンテーションを行い、その後チューターをつけて指導をしていく。それでもすぐに効果が現れないのが現状である。高校まではあまり努力をしなくても進級出来てしまうという環境の中でやってきた彼らを変えるためには、どうしたらよいかを考えた。今年はグループ活動（6 名１グループ）を展開させ、班活動の中で学ばせた。自治組織のように運営し、班長会議は月１回行い、グループの中で支えあい、引っ張り合うようにした。これまでのところ、良い方向に動いており、孤立する学生もなくなった。

上松：作業療法学科では、入学前に入試の成績の低かった学生を集めて学習指導を行った。また、定期試験の後はフィードバックをしてから再試験を行っている。
授業の中で小テストを頻繁に行うようにし、そこでも点数がとれない学生は自習教室をひらき、自主的に勉強をさせている。ポートフォリオという方法も取り入れている。

八尾：対策や制度づくりの後、それに息を吹き込んでいるのは教員達であり、私どもの教員はそれができていると感じている。

吉野：学力の低い学生、しつけが十分できていない学生が入学してくるが、それをこれまでの環境のせいにしても何も解決しない。何かきっかけをみつけて彼らのもっている能力を切り開けていけたら良いと思う。

小泉：在学中は褒めてもらえたことがすごく励みになった。それが大きなきっかけだと思う。
班活動はとても良い方法だと思う。

永井：各学科の取り組みを聞いてその通りだと思った。
フィードバックを適材適所で行っていただけると良いのではないか。
先生に評価されたなと感じると頑張れるし、次に進むことができる。

吉野：業界の人間として、今の学生に期待することがあったら意見を下さい。

永井：コミュニケーション能力の高い人材がほしい。
ゆとり世代、さとり世代といわれる彼らは、自分たちからアプローチしてきたり、考えていることを表出することが苦手な人が多い気がする。

小泉：同感です。
コミュニケーション能力がないと、患者さんが何を考えているのか、何を感じているのか引き出せない。指示待ち、消極的な人も増えている気がする。

吉野：コミュニケーション能力はキャリア教育の中でいま最も問題となってきていることですが何かご意見はありますか？

山野：生徒達を見ていて、自分から動けない者が多いのは感じる。高校においても、生徒会活動や委員会活動ひとつとっても、教員がやってみたらと声をかけてはじめてやる生徒が多い。しかしやることで良い経験にはなるので、できるだけそういった経験をさせる機会を増やしている。専門学校の場合は実習とかの場面で、そういった点を伸ばしやすいのではないか。

吉野：班活動でコミュニケーション能力は伸びるのでしょうか？

倉持：いろいろな年齢層の中でスタートし、はじめは大人がリードするが、月日が経つにつれ、

若い学生たちが追い付いてきて、はじめてグループ全体が同等となる。互いに学びあうことでチーム力は養われる。ただコミュニケーション能力に関しては、自分が言ったこと、書いたことを相手がどう感じるのか、という力が不足していることを強く感じる。その点についての指導を今１年生に行っている。

吉野：自分視点から、他人視点に変えていくことのむずかしさは確かにある。
学生時代にいかにこれが変えられるかはまさに専門学校に求められることではないだろうか。
若い人がいろいろな経験をしてきていないことが原因のひとつかと思う。

湯浅：私はＹＭＣＡ の卒業式に出席するたびに感動する。よくあそこまで教育してくれたと。
それでもまだ現場で即戦力となるには不十分なのだろうかと思うくらいである。

吉野：重点項目の退学率の低下への対策については、先生方の努力がよく伝わり、きっと将来、効果が出で来ると感じた。また、卒業生には、今後ますます在校生への情報提供等、かかわっていただけるとありがたいと思う。

山野：卒業生の皆さんには、学校とのつながりを、今後も継続的にもっていただき、より良いアドバイスをもらいたい。卒業生の同窓会としての力も期待したい。

小泉：卒業生同士の横のつながりがもっと強くなると良いと思う。かつて同窓会に参加した時は、同期では自分ひとりだった。でも、参加したことで「何か手伝えないだろうか」と思うようになった。

吉野：ぜひ校長先生に今後、同窓会組織が活躍できるようにがんばってもらいたい。

八尾：たまに同期で集まっているようだが、一部だけに感じる。20 周年には何か行いたいと考えている。

吉野：学校の財産は卒業生である。かれらに色々な面で関わっていってもらいたい。
学生募集に関してご意見はありますか？

山野：多摩地区からはどのくらいの学生が入学して来ているのですか？

八尾：介護福祉科は９割が多摩地区である。
OT 科は５割が多摩地区。ただ、今年度の現時点での合格者は８割くらいが多摩地区である。

山野：多摩地区の高校への募集活動のやり方がキーになるのではないか？
今年、介護が減少傾向にある理由は何か？

八尾：多摩地区では YMCA をすすめてくれる高校が多いことに感謝している。
私共の学校への入学者は、多摩地区に介護に進みたい学生が多い時は増え、少ない時は減る。また景気の上下にも影響されている。介護の減少は、高卒で介護の現場に直接就職する学生がいることが原因のひとつとして考えられる。しかし今後、制度の変更で、介護福祉士の資格を取るためには、現場経験プラス４５０時間の研修が加わるので、養成校への入学者が増えることを期待している。

山野： 福祉コースのある高校に重点的に動いているのか？

八尾： 特にしていない。

吉野： 高校に福祉コースがある学生が多く入学してくるのか？

山野：うちの高校の場合は、大妻などの大学に進学するケースが多い。

吉野：専修学校の場合、分野によっての浮き沈みがあるが、YMCA に行きたいという学生が減らないように、YMCA の魅力作りが必要なのではないか。

小泉：福祉を目指す生徒たちに、老人ホームの見学とか、将来のイメージやきっかけとなる体験をさせてあげられると良いと思う。

吉野：卒業生のおふた方が、大学ではなく専門学校を選んだ理由は何でしょうか？

小泉：早く資格をとり、早く現場に出て、早く稼ぎたかった。プラス近い学校を選んだ。

吉野：それは大切なことで、人間力だと思う。

永井：大卒後、社会人経験をし、それから入学したので、夜間部を選んだ。プラス勤務先から通いやすい学校を選んだ。

やはり早い段階でのアプローチは大切。中学、高校でうちの病院を見学して看護師を目指し、就職してくる人が年に１人位いるので、早い段階で種をまくことはとても効果的だと感じている。

山野：キャリア教育は小学生からと言われている。現在、高校では今いろいろ取り組んでいる。老人ホームに行ったり、理学療法に行ったりと、だいぶ機会は増えている。ただし、進学校はあまりやっていないと思う。

吉野：卒業生のいまのご意見の中に学生募集の今後のアイデアがあると思う。

他に意見がないようでしたら、議事は以上とする。

自己点検、自己評価もお読みいただき、次回に生かしたいと思う。

事務局から何か連絡は？

林：委員の皆様への謝礼は、次回委員会の時にお渡しする。

またこの後、隣の藍屋で食事の用意があるので移動していただきたい。

吉野：次回の日程について

候補日は 12/21、12/26、1/10、1/11。

（全員の都合を確認して）

吉野：次回は、1/10（金）19 時とする。

八尾：積極的なご意見をありがとうございました。

いただいたご意見をまとめ、次回、学校として何を取り組むかについて話し合いをさせていただきたい。

来年度については４月に委員の委嘱を行いたい。

以上